

記 念 講 演

ソーシャルワーカーに期待すること ～災害からの今後の展望～

福島県企画調整部長 櫻 井 泰 典
日本社会事業大学学長 神 野 直 彦

櫻井 ただ今、ご紹介いただきました、福島県庁の櫻井泰典でございます。本日はこのような貴重な機会をいただきましてありがとうございます。昨年の4月に福島に来てから、福島の現状というもの、なかなかうまく伝えられてないという現実直面しており、少しでも色々な話をさせていただきたいというような話を神野先生にしていたところ、このような大きな機会をいただきました。

折角いただいた場ですので、精一杯、頑張ってまいりたいと思いますので、宜しくお願いいたします。

私は、学生時代に神野先生のご指導を受けまして、福祉の世界、素人でございます。何を言っているのだというようなこともあるかもしれませんが、その点は、ご容赦ください。

また、今日は学生の方だけではなくて、OBの方もみえられていると伺っております。特にOBの方では、恐らく、発災直後の福島のほうで大変ご尽力されて、福島をお助けいただいた方、たくさんいらっしゃると思います。そういった方々も、ひょっとしたら、何も分かってないのではないかというようなお叱りを受けるかもしれません。しかし、そういった部分も受け止めながら、精一杯、頑張ってまいりたいと思いますので、本日はどうぞ、よろしくお願いします。

それから、本日、どんな話をしようかということですが、今日来られている方は、ソーシャルワーカーの方、それからソーシャルワーカーにこれか

らなろうとしている方々というふうに聞いておりますので、そういった、ソーシャルワーカーの方、これからソーシャルワーカーになれるような方に対してどのようなことを期待しているかといったことも話をさせていただきたいと思います。

最初に申し上げたように、そもそも今、福島県がどうなっているのかというところについて御説明します。外にいと中々、私自身も昨年の春に福島に来ましたが、分かっていなかったところが多々ありました。どちらの面もありました。そこを少しご紹介させていただければと思っております。光と影、明るく進んでいる部分も、皆さまのご想像以上かと思えますし、逆に、忘れかけてしまっているかもしれないけれども、実際に足りないこと、まだまだあります。その両面を、お話をさせていただければと思えます。

一般的なイメージとして、復興は進んでいます。が、震災後のイメージ、特に福島の場合は、原子力発電所の事故がございましたので、なかなか発災直後のイメージが非常にまだついていて、その結果、風評被害が残っています。他方で、今でも本当に大変なところもございまして、こちらについては、風化してしまっているということで、それぞれについて事例を示しながら少し紹介させていただきたいと思います。その後で、ソーシャルワーカーの主目指す人に期待することということでお話しさせていただきます。

最初、東日本大震災、これはもう皆さまに、ご

説明をしなくても皆さまの脳裏に焼き付いていると思います。2011 年の 3 月 11 日、東日本大震災がありました。原子力発電所の事故のイメージが強いかと思いますが、福島県も、もちろん沿岸部でございますので沿岸部では津波による被害がございまして、津波だけでなく、内陸部でも犠牲になられた方がおりますが、主に津波によりまして沿岸部、死者、亡くなられた方が 4000 人近くいらっしゃり、それだけの大変大きな被害でございます。家屋については、1 万 5000 戸以上が全壊となりました。

その後、よくご存じかと思いますが、福島第 1 原子力発電所で爆発がありまして、4 基のうち 3 基については爆発があり、その後、放射性物質が排出されるという事態になったところでございます。ここまでが 3 月に起こった事象であり、皆さまの脳裏に焼き付いているところかと思ひます。

それでは、それらが現在どうなっているのかというところでございますけれども、避難指示区域というのがございます。避難指示区域の面積は下に書いてございますが、ピンクの部分が帰還困難区域、黄色い部分が居住制限区域、緑の部分が避難指示解除準備区域ということで、帰還困難区域というところは、基本的には立ち入り禁止、黄色い居住制限区域は、立ち入ってもいいけれど、基本的には、宿泊は禁止という区域となっています。

このピンク、黄色、緑の部分が、何らかの避難指示が出ている区域が、ピーク時には全部の大体 12 パーセントぐらいでしたが、今は解除が進みまして 2.7 パーセントになっています。そもそも福島県は非常に大きな県で、関東でいいますと、1 都 3 県、全部合わせたぐらいの、大変大きな県ですが、現在は、2.7 パーセントにまで減ってきたというところでございます。

ただ、海外に行きますと、大概の人がそうかもしれないと思いますが、まだ福島全域に避難指示が出ているんじゃないかというような話をされることもありまして、決してそれはそうではない。他方で 2.7 パーセントの中におられる方にとっては、自分の家が 100 パーセント避難指示区域ですから、大変

大きな問題です。県全体が今も平常に戻っていないというわけではないという、この両面を何とか分かっていたいただきたいと思っています。

この 2.7 パーセントという割合を聞いて、思っていたイメージよりも小さいなと思った方どれくらいいらっしゃるでしょうか。ありがとうございます。大体、思ったとおりだったという方は。ありがとうございます。思っていたより大きいなという方は。あんまりいらっしゃいませんか。ありがとうございます。いずれにしても、こういうふうなご興味を持っていたいただいているだけでもありがたいと思いますが。

元々、今日は社会問題に大変関心の深い方が招かれているということなのですが、福島県内の大学や、あるいは役場の職員などを相手にお話しさせていただくときでも、2.7 パーセントという少ない数値ではなく、まだ 10 パーセントぐらいだと思っていたという方が非常に実は多く、まだ理解が進んでないところがございしますが、関東の人はこういった認識の方が多いかと思ひます。

避難者数につきましても、カウントの仕方については、色々ありますが、少なくとも 2016 年の 5 月時点でもピーク時の大体半分ぐらいの形ということでございまして、一時よりは大幅減ってきております。これも、減ってきているからいいというわけではなくて、全員が避難しているような状況じゃないというところも分かっていただければと思います。実際、避難されている方にとっては、それが、自分の人生や場を失っているわけなので、非常に大きな問題ではあり、大体まだこれぐらいの方が避難しているということでございます。

次に、県内の空間放射線量です。これについても、色々な、ご意見があるかもしれませんが、同じように観測した数値で見ていただきますと、震災以降の風向きの関係で、赤い色が第 1 原発ですが、右下の図でいうと。風が北西に吹いていた関係で、県内の中では福島市は相対的に高いレベルにあるのですが、福島市は 2011 年 4 月で 2.74 マイクロシーベルトだったのが、2017 年 6 月には

0.17 マイクロシーベルトということで、少なくとも、相対関係でいうと相当落ちているということと、他の都市と比べても、そんなに相当なレベルではなくなってきてはいるということでございます。だから、もちろん近く、赤い部分の中でまだまだ高い所はありますが、相対的には少し落ちてきてはいるということでございます。

こちら、県内紙の写真ですが、震災直後は、それこそ小学生が学校に行く時にマスクを着用しなければいけなかったりするような所もありましたけれども、今は、普通に生活しておりますし。右下の写真をご覧になってわかるように、県の中で2番目に大きな郡山という、新幹線の駅があるところですが、普通の生活をしています。

次に、これは皆さんが行くような場所ではないかもしれませんが、福島第1原発構内の作業環境の変化ですが、福島第1原発、まさに事故があったあの原発ですが、こちらの報道イメージは皆さん覚えておられる方もいらっしゃるかと思います。バスで報道陣が防護服みたいなのを着て、マスクもして取材をしていたというのを覚えていらっしゃる方もいらっしゃるかもしれません。

事故後は、しばらくの期間は、ピンクの範囲で、全面マスクでの作業が必要となっていました。現在は実は、元の赤い場所のほとんどは普通のマスク程度で作業できるところがほとんどになっていまして、私も何度か行っていますが、スーツにそのままマスクもしなくて、バスの中だけマスクも不要で、グリーンヘルメットをするだけという状態で、かなり近くまで行くことができています。これは構内の地表をアスファルトで覆うなど、放射線量低減の取組をしているからですが、これだけでも大分、震災直後から素直に大分違うということがお分かりいただけるかなと思っています。

復旧・復興、原発事故だけでなく、福島は当然、地震による被害も、大変大きかったです。道路等については、浜通り、特に海沿いは、まだ、そもそも復旧工事に着手ができなかったのですが、今では99パーセントが着工しています。最初の段階では避難指示が出ていたという関係で、そもそ

も着工ができなかったというところがあるなど、宮城・岩手の2県よりは遅れているところではありますが、今、ほとんどが復旧してきてまして、着工ベースは99パーセントですけども、完了ベースも91パーセントということで、ハードの面の整備の方は大分進んできております。

さて、この中で福島県に旅行で来られた方などはいらっしゃいますか。ありがとうございます。何名かいらっしゃいますが、想像以上に福島は東京から近い所で、福島駅まで、大宮からですと最短で56分で着きますし、その手前の郡山でしたら40分ぐらいの乗車で着くことができます。深刻な事故がありましたけれども、風景等は変わっていません。

県内には滝桜という有名な桜の観光名所がありますが、福島は、大変花が美しいところが沢山あります。

春、大変、大きな桜ですが、この滝桜はJRのポスターなどにも使われていますが、三春町という福島県の真ん中の辺りの町に大変多くの方に来ていただいております。

夏、右側の、馬に乗った武士がたくさんいますけど、これは1000年以上続いている神事で、7月の末に南相馬というところで相馬野馬追という祭事が開催されます。写真に写っているのは10頭程度ですが、本当は500騎、500頭の馬に500人の武士がまたがって行列をしたり、あるいは旗の取り合いをしたりするということで、大変多くの方に来ていただいております。

それから秋、左下の写真ですけども、只見線の風景になります。福島は、新潟と県境を接していますが、その奥のほうの奥会津という地域では、大変今、台湾の方にも、この風景が美しいということで、わざわざ写真を撮りに来ていただいたりする方もいらっしゃいます。列車の本数が大変少ないのですがシャッターチャンスを狙って、橋が見えるところでカメラを構えて待っている方、外国人の方、たくさん来ていただいております。

そして冬、右下の写真ですが鶴ヶ城ということで、こちらは、大河ドラマ等にもなりましたので

ご存じの方も多いかと思いますが、会津若松、鶴ヶ城、こういったものも全て網羅されています。

観光客の動向については、大分戻って来ましたが、いわゆる風評、特に春先等につきましては、先ほどの問題、生活もそうですけれども、元に戻っている部分も大きいのですが、震災前と比べて中々回復しないところもあります。

それから、外国人観光客数については、震災前比 8 割を超えているのでそれほどのことはないのでと思われるかもしれませんが、この間は日本に来て外国人観光客数は 2 倍、3 倍になっており、シェアでいうと、全く下がってしまっている状態です。残念ながら、なかなか「もう大丈夫です。」「安全です。」と言っても来ていただけないという現状があります。

先日も、韓国の広報大使がチャーター便を飛ばして福島空港に来るというお話がありました。これは、向こうの会社が頑張ってセットしてくれたありがたい話でしたが、直前になって、乗員が、着陸したくないというところで急きょ変更になってしまい、最後は日本航空会社に頼んでみるという方法をお勧めされました。

実際、数字で見ますと、全くそんなことないのにも関わらず、止めてしまうというところがあり、いくら説明してもなかなか分かっていただけないところもあるなと思っています。しかも、会社の幹部の方は分かった上で、大丈夫だと言ってくれていたのですが、中止になってしまい、残念なところであったと思います。

ただ、明るい話題で言いますと、左下にございますけれども、色々な国内、旅行雑誌とか、あるいは旅行サイトとかございますけれども、こういった中で福島県内の温泉地が上位に位置付けしていただきまして、少し賑やかさが戻ってきたかなと思っています。

それから右側ですけれども、福島は酒処でございまして、日本酒の全国新酒鑑評会が毎年行われている中で、ここで金賞を取った蔵の数が 5 年連続で日本一となっております。元から蔵元数が多い地域ではございますけれども、特に直接口にす

るものという風評の影響を最も受けやすい分野で、5 年連続トップというのは本当に意義があるなと思っておりますし、実際、来てみると、大変おいしくいただけますので、こちらもまた、来ていただいたときなどや、東京のお店に寄ったときに飲んでいただければと思っています。

食の安全についてですが、日本の基準値は、結構厳しい基準でありまして、その上に県独自のモニタリングをしております。

次に左の、特に米を見ていただくと、米についてはサンプリングではなく出荷する米全てを全量検査しています。1024 万袋全て一個一個検査しています。その結果、お米は基準値を超えるものではなく、ほとんどが測定不明の下限値以下の数値となっています。資料の下に書いてありますけれども、機械の関係で検出下限値が 25 ベクレルとなっています。検出下限値以下が 99.9 パーセントということで、かなりきちっと、測定している結果となっています。これはイメージよりも、少ない数なのではないかなと思っています。サンプルではなく、全量を検査しています。

野菜は下の図等は、サンプルといいますか、例えば畑ごととか、そういう検査になりますけれども、どちらかというと人の目が掛かっているものについては、基準値を超えるものはない状態です。

ただ、野生のキノコ、そして湖などで取れるものについては、若干基準を超える場合がありますけれども、それも年を追うごとに、大分少なくなってきたしております。当然、検査をしたものしか流通しません。

次に復興に向けた取組ですが、少し画面では見づらいかもしれませんが、福島では県内各地で色々な取組をしていただいております。特に今までは原子力発電所に関連した産業が中心だった浜通りで、エネルギー、同じエネルギーでも自然エネルギーを使って、それを県が 100 パーセント、県内で使っているエネルギー、電力だけではなく全てのエネルギーの 100 パーセントを自然エネルギーで作れるようにしようという目標を掲げております。

プロジェクトとしては、巨大な風車による実証実験を行ったり、あるいは送電線を繋いでみたりと、色々なことに取り組んでいます。これを機に、どちらにしても廃炉をしなければならないので、研究機関にも来てもらうなどの取組も行っております。まだこれから色々な問題がありますが、イメージで言いますと、リーマン・ショック直後との比較ではありますけれども、県全体では例えば製造品出荷額で40パーセント以上落ち込んでいました。

特に、右側を見ていただくと、浜通り、海沿いですね。海沿いの浜通りの高くなっているところのこれは数字ですけれども。避難指示等がでているので、当然といえば当然ですが、まだ震災前と比べて10パーセント程度というふうな低い数字になっております。申し上げましたけれど最終的には色々な拠点を沢山出来つつあります。

次に洋上風力のご説明となりますが高さが霞が関ビルより高いぐらいになります。これは海に立っているというか浮いているのですが、こういうところを実験的にやりつつ、将来的には県内エネルギー需要の100パーセント相当を再生可能エネルギーで確保することを目指しています。現在は、大体3割弱ですが、2020年の秋には、まず40パーセントにしようということでやっております。

県内エネルギー需要の100パーセント相当なので、電力だけではなく、もっと高い数字をマークして、進め方としてもしっかり進んできているのではないかと思います。色々な分野を使いながら他にはない復興都市の構築支援や、エネルギーを作るだけではなく、電力会社に電力を売ったりするなど、出来ることをどんどん、取り組んで行こうということでやっております。

ということまでが明るい話ですが、ここからが、「影」の部分になります。まず一つ目、「風評」ですが、先ほど申しあげました食品には、まだまだ風評があります。福島は、桃やサクラボなどが大変おいしく、元々、高く評価していただいたのですが、震災による風評の影響があり、ま

だまだ価格差があります。最近は少し、だいぶ回復はしてきましたが、元々、他県と比べても少なくとも遜色はない品質だったのですが、ちょっと下がり過ぎてしまっています。

福島の桃に対する風評の話ですが、ミスピーチという桃をPRする女性クルーがいるのですが、東京の百貨店で桃を配っている際に、お客様に「この桃、おいしいね。」と言っていたのですが、どこ産の桃かと聞かれて「福島の桃です。」と答えたところ怒られたというような話もありました。寂しいことですが、そういったところもまだあるのが事実です。

実際に桃も米も牛もそうですが、実際に消費者の方に聞いてみますと、すごく危ないと思っているわけじゃないと言いつつも、店頭で商品が並んでいたら購入をためらうという方も、若干ですが実際にいらっしゃいます。先ほどの米の検査等についても、検査を行っていること自体知っているかという知らないという方が多い訳ではないのですが、かなりまだまだ多いなということで、こちらについては、まだ回復しきっていないというところでは。

避難指示区域の面積ですが先ほど私、今現在、2.7パーセントになったと申し上げましたけれども、その12.3パーセントと2.7パーセントの間の9.3パーセント分というのは、今まで避難指示があったところに避難指示が解除されたという場所になります。ここの数字、今、そのセクションや場所ごとの比重になりますが、比較的早期に解除した地域になります。田村市や、川内村などでは、帰還率が100ではないにしろ8割近くということで、比較的高い数字になっておりますけれども、最近、解除したばかりの浪江町や富岡町につきましては、これはまだ、解除したばかりだからということもありますけれども、1パーセントということで大変低い数字になっています。

これから時間とともに帰還率も上がってくるものと思っておりますけれども、どうしても早期に解除したところと比べて、6年間避難生活を送られている方、例えばお子さんが小学校に入学し、

そちらにも友達ができたというような家族の変化がありますので、どんどん帰還に対するハードルが高くなっているなという現状があります。

ここからは少し社会福祉っぽい話になりますけれども、避難生活が与える影響ということでお話させていただきます。

仮設住宅に入られる方は、段々、減ってきていますが、まだ沢山いらっしゃいます。これはイメージどおりかもしれませんけれども、行ったことある方もたくさんいらっしゃると思いますが、仮設住宅が狭いということと一般の住宅に比べるとお隣の物音なども聞こえたりして、あまりプライバシーの確保が十分ではないという問題があります。そもそも住んでいる場所から避難していますから、元々、慣れ親しんだ町ではないということと非常にストレスが掛かる生活になっています。

こちらの支援員、役場の職員もそうですし、もちろんソーシャルワーカーの方もたくさんいらっしゃると思います。見守り活動などをやっていただいて、仕事としてやっていただける活動もあります。また、ボランティアの方に大変お力を貸していただきまして。集いの場づくりや、小さな部屋にこもりつきりにならないようにということとたくさんの活動をいろいろしております。

ただ、この仮設住宅の暮らしというのは徐々になくなりつつあるのですが、避難住宅、仮設住宅から出ればそれで問題が解決するかというと、それは実は、そんなことはございません。仮設住宅から出て、避難元に戻るケースとして、県では災害公営住宅ということで、公営住宅を整備し、そちらのほうに入っていただくという取組を進めています。

例えば入らざるを得ないから仮設住宅に5年間入って、そうするとその環境変化自体が、すごくストレスになり、変化自体が課題を生む形となっています。例えば先ほど仮設住宅のほうで物音が聞こえ過ぎて、プライバシーが保てないというような話を申し上げましたけれども、それで災害公営住宅に戻ったところ、逆に5年間はその環境に慣れていた訳なので、今度は静か過ぎて眠れない、

あるいは、側に人がいないと何か寂しいとかいう課題が出てきています。

これは、災害公営住宅だけではなく、実は避難元でも似たような声が聞こえてきます。そちらのほうの方が分かりやすいかと思います。元々、比較的山奥の周囲に家がないようなお宅に住んでいて、元々、住んでいるときは、それで普通の暮らしをしてたところ、やむなく避難生活をして仮設住宅に入らざるを得なくなりました。そうすると最初はプライバシーもないとか、そういうストレスはあったと思います。ところが元の家に戻っただけなのに、近所に、元々、犬1匹いない、見える範囲にはいないわけなので、元に戻っただけだけど今度は人が側にいないとちょっと寂しいとか、怖いとか思われるとのことでした。

それは当然だと思います。5年間は周りに人がいる生活だったので、仮に住む場所が完全に元に戻ったとしても、それでも問題が何もなくなくなるわけではなくて、変化自体が大きなストレスを掛けてしまって、皆さんにすごく負荷を掛けていたなという課題を感じました。

また、元々、ご家族で一緒に住んでいらっしゃった方の話にはなりますが、どちらかという和高齢世代の方は、生まれ育った町に戻りたいという方が多くいらっしゃいますが、若い方の場合に戻りたいという気持ちが仮に一緒だったとしても、実際、お子さんが小学校1年生で、避難先で小学校に入ったりすると、お子さまの友達はそちらに多いという状況になります。そうなると、一緒に帰る、帰らないというより、これは、同じ市の中でもあり得るということは聞きますけれども、同じ市の中でも避難していた先から同じ市の元の家に戻る両親と、若い夫婦のほうは避難先の家にいるよということになってしまいます。すると、東京ではないのですが核家族化しているという状態になっています。

他方で、これは私が何度か聞いたところで皆さん仰っていましたが、先程の仮設住宅ですとプライバシーがない反面、逆に、こもっている方でも割と外に連れ出しやすかったと見守っている方が

仰っていました。災害公営住宅や元の家ですと、中々一回引きこもりがちになってしまった人を外に連れ出すのは、意外と難しいというような課題もあるということです。

次に三つ目ですが、避難生活だけではなく、元々、例えば介護や、あるいは別の理由であまり家から出たがらないお子さまをお持ちだとか、障がいがあるなど、それぞれ何かしらの課題を抱えている中で、それプラス避難に加えて今申し上げた環境変化等により、問題が非常に複雑化してしまっている事態も出てきています。元々は何か一つの問題に対して、それに向き合っていればよかったかもしれないのが、もはやそうではなくて、どんどん複合化してしまっているというようなことになっています。

今日の講演の冒頭で、福島的光、影と言いましたが、影の中にも光もありました。今日は若い世代の方も沢山いらっしゃるということでちょっとこの話をさせていただきたいと思います。今、福島には色々な方、わざわざ県外から来ていただいて移住していただいている方も沢山いらっしゃいますし、色々な若い方が、この地域で何とかしていこうということで立ち上がっていらっしゃいます。

その一つは、Uターンです。後でご興味がある方は掲示などを見ていただければと思いますが、南相馬市というところに和田さんという方がいて、非常に前向きで、元々、ご自身の出身地に自分で戻っているから言えることではありますけれども、避難地域、避難指示が解除されて帰ってくる人が少ないというけれど、この数年間、人がいなかった場所なのに、急に人口が増える場所というのは実は日本にはあんまりないという視点です。これは、我々が決して言うことは出来ないのですが、彼が言うとは大変説得力のある話になります。帰れない理由が100パーセントあるなら、その100個全ての課題を解決する会社を自分は作りますと言って、自分で起業されています。

彼が取り組んだ最初の課題は、まだ避難指示が解除されていない時期に、冷たいお弁当でしか食

べられなかった、避難指示が解除された時も泊まれないというのを分かっていたので、事業活動や工事関係者の方はいるのですけれども。食堂を作りたいと言ったけれど、作ったらどうだと言っても、みんなそんなことやっても儲からないよとか、ペイしないよとかいうことを言われながら、じゃあと言ってお店を借りて食堂を開店しました。開店してみたら行列のお店になって、みんな温かいものを食べ、本当は食べたかったのだということだと思います。そして繁盛するようになったら、元々、ただで貸してくれていた人が、自分の店だからといって貸与することになりました。それで一つ社会課題が解決しました。

次は、解除された時に買い物する場所がないということで、コンビニみたいなよろず屋を立ち上げて、それで販売を始めて、今度は結構繁盛してきたらローソンが来るようになりました。コンビニが outlet してきたので、敵対はしていないのですが、結構売り上げが大変だと言っていました。その後、この下のランプファクトリーというのがありますが、これは皆さんが帰還しない理由が何だろうということを考えたときに、奥さまがたが空いた時間で働ける場所があれば帰ってきやすいのではないかとということで、そういう長くない時間で、フルタイムじゃなくて働いて、かつ女性の方が働けるような仕事は何かないかというのを彼が探してきました。

ガラスメーカーで有名な HARIO と掛け合って、アクセサリーの工房を、これは美容院に入居できたのですが、工房を南相馬市に作りました。これは何か市場化するためにはいいらしいのですが、ある程度の期間で、出来るようになって、且つ、逆にあまり長い時間やると小さいので、集中力が欠けてくるので、むしろ短い時間で集中してやったほうが良いということで、そういうタイプの仕事だということで、今7、8人の女性が雇用されています。

また、町が明るくなるようにということで駅から近い所に工房を作り、ここに書いてありますけれども、外からガラス張りになっていて、外から見

やすいところで女性がアクセサリーを作るというような見せ方の工夫を取り入れていて、活気があるような賑わいを作りたいということでそういう枠組みを作っています。現在進行形で、このランブファクトリーもそうですし、また次に何か近くに行くのだというようなことをやっている、こんな方もいらっしゃいます。

そして、多くの方に、今でもボランティアで来ていただいています。この中にも来ていただいた方がいるかもしれません。発災直後と違って、家屋の片付けとか、そういったボランティアのニーズはだいぶなくなってきているのですが、しかし先ほど申し上げましたけれども、まだまだ例えば、町中の賑わいづくりじゃないですけど、ちょっとイベントやるとか、そういった場にも引きこもりがちの方々を連れ出したり、あるいは少しストレス抱えている方にお話しになったりということで、こういった仕事もごございますし、その他にも色々ありますが、結構今でもたくさんの方に来ていただいています。

今日、主に卵の皆さんに期待することということですけれども、先ほど申し上げましたように何か一つで挑めるのではなくて、特にわれわれのところは課題を動かしているということですだからこそ、熱意と専門知識が必要で、この素晴らしい環境の中でぜひ、知識とスキルを身に付けていただき、今日ここに沢山の、大変立派なソーシャルワーカーの皆さん来ておられる、OB・OGの方も来ておられると思いますけれど、そういった方々になってほしいというのが一つです。

次に、福島の方で言いますと、浜通り地方の課題は山積していて、是非、地域に来てほしいと思います。勤めていただければ一番ありがたいです。ステップが色々あるのでちょっと、学生の皆さんとしてということですが、南相馬市だけがボランティアを募集しているわけじゃないのですが、今日のお話をさせていただくに当たっていろいろ教えていただいたり見せていただいたり、何度か行ったのが南相馬市で、うちの名前出してよと言われたので出しましたが、これは今、募集中

でございますので是非来ていただきたいなと思います。

ボランティアだとちょっとっていう方、もしアルバイトがてら来てみたいという方であれば、そういう枠も国で用意しました。これは、春休みには100人ぐらい来ていただいたのですが、先に2週間有給で働いていただいて、ただ働くだけでなくて浜通りの被災地等見ていただき、あるいは地域の住民の方々と触れ合っていたくというような企画にしておりますので、この辺も、もしお休みがありましたら参加いただければなと思います。

最後になりますが、それもということで皆さん、こういったものがたくさんあると思うので、なかなか分からないところもあるかもしれませんが、福島は本当に近いので旅行先にもベストな場所ですので、来ていただくというのが福島の現状を知っていただくことになると思います。先ほど風評の話をしましたが、例えば私がいくらしゃべっても、分かってくれる方は分かってくれるかもしれませんが、一方で、役所に信頼がないからかもしれませんが、役所の言うことは聞けないということで正直、反応が悪いこともあります。

実際、福島に来ていただいて、自分が見聞きしたことを、お友達やご両親、ご兄弟の方に話をさせていただいて、それから、「今、福島に行って大丈夫」だとか、あるいは、「福島にこんなおいしいものがある」ということが伝えられればなと思います。これは、我々がメディアを使って言うよりは、人と人が直接見たことを伝え合うという事のほうが、何よりの風評回復だというふうに思っています。風評もそうですし逆もそうですが、今でもこういう状態だとか、避難を強いられている人がいるということを見ていただいて、これは、そちらについても同じように伝えていただくというのが一番お願いしたいこととございます。

最後に、よく、この仕事をするようになってから、福島って復興できるのですかというようなお問いをいただくことがあります。今日は多分ない

と思うのですが、時にそういった問いがあります。特に海外にいる時にあります。ですが、そういった時は二つ答えるようにしてしまっていて、一つは起き上がり小坊師、これは福島の特産品でありまして、これは必ず立ち上がる。100 パーセント立ち上がる、それが福島の心髄ですと、必ず復興しますという答えが一つです。

それから、パーソナルストーリーとしましたけれども、非常に個人的な話になりますが、私は母親が広島でございまして、私の母が、ちなみに臨床支援員ですので、皆さまと比較的近いかと思いますが、母が生まれた頃というのは、広島に原爆が落ちて世界中に名が知れ渡り、決してその時点では、広島がいい意味では有名だったわけではないかもしれません。土地は持っていてもしようがないから売ったらいいのではと言われたというような話も聞きました。ただ、それから数十年たってみて、今、多くの方が広島、国内からも海外からも集まっていただいて、原爆が落ちたという広島のイメージが、恐らくポジティブな意味に、平和であるとか、その他プラスのイメージに転換できているのかなと思います。

福島も今、国内以上に海外では有名ではありませんけれども、ひょっとしたらポジティブなイメージもあるのかもしれません。でもそれは、少し時間が掛かるかもしれないですが必ず変えていけると私は思っていますし、そうするのがわれわれの責務かなというふうに思っています。

ただ、時間は掛かるといっても、何もしなくて変わるわけではないので、何とか一歩一歩でも、これは本当、明るい方でお話ししてないこともそうですし、引き続き、この課題を皆さまと一緒に、ご苦労されている皆さま、課題を持たれている皆さまのケアというものをしっかりと進めていながら、ということでございますけれども、何とか再び震災前以上に福島が輝くようにもっていききたいというふうに思っております。

ちょうど一つの時間かと思えます。拙い話で恐縮ではございましたけれども、ご清聴いただきましてありがとうございます。後ほどまた座談会

でまいります。どうもありがとうございました。

神野 櫻井部長どうもありがとうございました。櫻井部長の話を受けて、ソーシャルワーカーに期待される使命を考えていきたいというのが、私の講演の使命でございます。最初に申し上げておきますが、私は視覚障害者で光を目に入れることができません。テレビも見ることありませんし、パソコンも見れません。従って、パワーポイントを見ないと講演を聴いた気がしないという方は、残念ながら諦めていただきたい。お手元のレジメで話をさせていただきますので、お許しいただければと思います。

そこで、お手元にいった記事の、レジメがいつているかと思えます。お出しいただいて、1 枚、おめくりいただいて 1 ぽつを見ていただければと思います。ソーシャルワーカーに期待される使命、これが今回、私に与えられた課題でございます。櫻井部長の発表された福島の現状を念頭に置きながら、この課題を考えていこうと思えます。

私ども日本社会事業大学の使命でございますが、学長に就任して以来、申し上げておることですけれども、私どもの本来の使命は『悲しみ』を『幸せ』に変えるために、指導的な福祉人材を養成することにある。

私どもの大学の誇りは学生ですね。使命感に燃えている学生が集まっている。これは自画自賛しているわけではなく、先日、菊池先生が主催された福祉社会学会、ここにもお集まりいただいた研究者の皆さんがたも口をそろえて、私どもの学生を賛美していただきました。私はそこでも申し上げたんですけれども、私どもの日本社会事業大学というのは、GHQ の指示に基づいて設置されているわけですね。

社会保障という言葉が最初に用いられたのは、フランクリン・ルーズベルトがニューディールの第 2 期に社会保障法という法律をつくったことに起因します。

ところが、日本が敗戦し、その直前にフランクリン・ルーズベルトが亡くなります。そうすると、

トルーマンが大統領になるのです。ニューディールを推進したニューディーラーを、日本に送り込みます。GHQのESSというところに送り込むわけです。

ESSは経済科学局って訳されてるところですが、ここに集まったニューディーラーたちが日本の社会改革に次々とやってきます。挙証しておりませんが、恐らくそこに集まったニューディーラーたちの勧告に基づいて、私どもの大学ができていたのではないかと思います。

私たちが今、抱えている大きな「悲しみ」として大災害があります。もちろん、私たちの市場社会では、市場がさまざまな格差や貧困、生活環境を生み出していきますから、日常的にもそういった「悲しみ」にも取り組まなくてはいけないんですけれども、災害が生み出していく「悲しみ」にも取り組まざるを得ない。ただ戦争、つまり戦災と災害とどこが違うか。戦災は戦争という人間が作り出した悲しみです。それに対して災害というのは人間が作り出した悲しみではないと、取りあえず考えることができます。

しかし、先ほどの櫻井部長のお話からしても、考えさせられます。本当に災害というのは、人間が作り出したものなのだろうかということを考える必要があります。とりわけ人間が今、直面している最大の危機が環境問題ですね。IPCC、つまり地球環境問題に対する国際機関も、繰り返し、この異常な気象現象は人間が作り出したことで間違いないんだ。大災害が繰り返されるし、そのこと自身が人間の社会に対立と、それから暴力を生み出すんだ。繰り返し警告しています。

パリ協定をトランプが離脱した日に日本政府は、このパリ協定を実現すべくカーボン・プライシングに関わる検討会を立ち上げました。私はその責任者を仰せつかりました。そこに山本環境担当大臣においでいただきましたが、山本環境大臣は自分は環境をつかさどる大臣として、自分の言葉で語りたいとおっしゃり、トランプ大統領によるアメリカのパリ協定からの離脱に失望と怒りを覚える。こういうふうにおっしゃっていらっしや

います。

私は財政学をやっておりますので、ソーシャルワーカーを理解しているわけではありません。分からないものを学ばなくてはならないときに、どうしたらいいかといえば、まさに常識を手掛かりにするしかないんです。

常識としてソーシャルワーカーが、どういうふうに理解されているのか。かっこ2の所にございますが、国際ソーシャルワーカー連盟と国際社会事業大学連盟によって2000年に行われた、採択された文章、これからそれを取っております。ここにご覧いただければと思いますが、ちょっとミスプリントがあります。ソーシャルワークのところに、閉じるかぎがかっこが付いています。これ取った方が分かりやすい。

ソーシャルワーク専門職は、人間の福利、これウェルビーイングですね、の増進を目指して、これ目的ですね、そして社会の変革を進め、変革、これリフォーメーションですので、改革、リフォーメーションっていうのは本来の秩序に戻すことをいいます。従って、リフォーメーション、改革っていう一語だけで宗教改革を意味します。本来の神の秩序に戻す。社会の改革を進め、人間関係における問題解決を図り、人間の解放を促していく、これがソーシャルワーク専門職の使命だと、こう規定に書かれております。

次のページをめくってください。東日本大震災という関心からの挑戦、この東日本大震災っていうのは、私たちが生きているどういう時代に起きたのかっていうことを考える必要があると思います。どういう問題が起きていたのかっていうと、かっこ2に書いてある。二つの自己再生力の喪失という、人間の歴史にとっての危機の下で起きてるんです。

自己再生力を失ったことを取り戻すことを、つまり、自己再生力を維持していくことを持続可能性といっております。一つは人間の社会の自己再生力の喪失です。

もう一つは、自然の自己再生力の喪失です。そういう二つの自己再生力が喪失した過去に東日本

大震災が起きている。

この二つの自己再生力を失いながら、大きな歴史の時代の曲がり角にきている。その曲がり角っているのはどういう時代かっていえば、かっこ2のところ、社会保険国家、これは福祉国家というふうに理解してもらっても構いません。福祉向上とは生活保護と社会保険という、政府が市場の外側でお金を再分配していることによって、人々の生活を保障していこうという国家ですね。

社会福祉国家から社会サービス国家、社会サービスでもって、人々の生活を守っていくような国家に変換すべきだった。ギデンズは、社会投資国家、教育を入れて社会投資国家といっております。

重化学工業を基盤とした、そういう所得再分配国家から、所得再分配国家からじゃなくて福祉国家から。サービス産業、知識産業、いずれも人間と人間による触れ合いによって作り出されている産業ですね。サービス産業や知識産業。そういうことを基盤にした福祉国家、ポスト福祉国家、これをどうやって模索して行こうかと。模索し転換していく時代、そういう時期にこの東日本大震災は起きているということです。

かつ、東日本大震災の大きな特色があります。それまで私たちは、大きな巨大な大災害として二つ経験してるわけですね。一つは、関東大震災、もう一つは阪神淡路大震災です。この関東大震災も阪神淡路大震災も、いずれも大都市で起こった災害です。今回の東日本大震災とは、それと全く質が、大震災の質が、それがこの大地と海に付着する、ありとあらゆる人間の生活を襲ったんです。農村、漁村、都市という人間のあらゆる生活様式が襲われた。そういう災害だからということを、頭に置いていただいた上で3ページを、次のページをめくってください。

大災害では生と死、残酷なドラマが演じられてしまうんですけれども、そこに何か明かりを見いだすとすれば、それは生と死を巡る大きな悲劇の中から真実が明らかにされてくるということです。

一つは、かっこ1のところに書きましたけれど

も生命主義です。人間の社会にはさまざまな価値があるけれども、その人間の社会が作り出している価値体系の中で最上位、最も上に、最上位に位置付けられなければならないのは人間の命だ、生命だということですね。命ということを最大の価値に位置付けて、私たちの人間の社会は構成されなければならないということです。

もう一つは、生きるっていうことは共にするものだってことです。人間と生きとし生ける自然とが共に生きていく。そういう二つの意味での生を共にするっていうことを学んだはずですよ。

もう一つは、3番目は、参加主義ですね。人間の社会を襲ってくる共同の困難、これに対しては、ただ傍観者として手をこまねいているだけではなく、問題解決者として参加しなければならない。こういう真理に気が付いたはずでございます。次のページをめくってください。

本質をあぶり出されたことを学びながら、この悲しみをどうやって分かち合うのかということだと思いますが、ソーシャルサービスに書いてあります。このソーシャルサービスというのは、かっこ1のところに書いてありましたけれども、ソーシャルサービスっていうのは、スウェーデン語でオムソーリというふうにいます。オムソーリという意味は、元々、悲しみの分かち合いです。従って、日本で使っている社会福祉よりも、やや広い概念としてオムソーリは使われています。

例えば、日本の場合に社会福祉っていうと普通、教育を入れませんが教育はちゃんと入ります。教育も悲しみの分かち合いですかと聞けば、スウェーデン人は必ずそうですと答えます。さらに、医療をどうすると入れない場合があるんですけれども、医療も、もちろんそうなります。従って、ソーシャルサービス、社会サービスというのは悲しみの分かち合いだということですね。この悲しみの分かち合いっていう行為にすると、悲しみに暮れている人は当然幸福になります。

悲しみを分かち合うと、分かち合った人、これも幸福になることができます。なぜなら、人間が幸福だということを実感できるのは、他者にとっ

て自分の存在が必要不可欠な存在だったんだということを認識できたときに、私たちは幸福だということを実感できるからですね。

さて、悲しみの分かち合いということ、先ほど物事の本質を暴き出してくれたことからいえば、共生主義、生きるってことを共にするってことです。共生主義っていうのは、誰もが誰もに対して不幸にならないようにしようと思い合っている。誰もが誰もに対して幸福になってほしいと願っているんだっていう確信が存在している、これが共生主義です。

社会はラテン語のソシアス、つまり仲間っていう意味からきています。仲間ができるっていうことは何を意味するかっていうと、これを誰もが誰もに対して不幸にならないようにしようというふうに、願っているんだという確信があることです。この確信が実は民主主義を支えているのです。

民主主義っていうのは必要なのは何かっていうと、親和的な対立です。どんなに激論が交わされても、お互いにお互いが不幸にならないでほしいと願っている、激論が交わされているという確信がありますので、対立は親和的な対立になります。例えば家族を考えていただければ。家族の中で子どもと親とか、子どもの将来に対して激論を交わされたとしても、お互いに、つまり子どもは、両親は、あんな無理なこと言ってるけれども、自分が不幸にならないでほしいというふうに願って言ってくれてるんだという確信がありますので、対立は親和的になります。

しかも思いの丈、自由に自分の意見が、思いの丈の議論ができる、親和的な議論。この二つが民主主義を支えるわけですね、親和的な対立と親和的な議論。

そうすると、私たちが悲しみを分かち合ったときに、必要なサービス、社会サービスを出すわけですが、これは同じサービスを出すわけじゃありません。これソーシャルワーカーの34章目に、ニーズを埋めることができるかってことを判断するわけです。従って、それぞれの人々に違ったサー

ビスを提供してあげなきゃいけないわけですね。それぞれの人々の不幸を解消できるようなサービス、これを組み合わせながら提供してあげることが重要になってきます。

しかし、そのときに重要なのはユニバーサルに出すってことです。必要に応じて出すのではなくて、その人が男性か女性か、どういう職業に就いているか。さらに重要なのは所得によってサービスしちゃいけないと。そういうことを、いいですか、あの人にはこんなサービス、この人にはこんなサービス、違ったサービスを提供するわけです。必要に応じて提供するわけですが、そういうことを可能にするためにはどうしたらいいか、民主主義です。その民主主義が有効に機能するための共生意識がないと、それはできません。必ず一律に配れっていう意見が出てくるわけです。

従って、私はベーシックインカムには反対しているんです。

さまざまなことを、生活困窮に陥っている、多様になってるんですね。障害を持っている、それから心の病を持っている。人の結び付きはどうかということによって違っての、ベーシックインカムの状況が何かといえ、その人の所得が高かろうが低かろうが、仕事をしていようがしまいが、働く意欲があろうがなかろうが、家族の状況やコミュニティの状況が、どういうふうなネットワークの中で生きているのか、それから、その人の財産がどのくらいあるか、ストックがどのくらいあるのか。一切無関係に、無条件に無差別に給付する制度のことを私たちは、ベーシックインカムと呼んでるわけですが、それではとてもではないけれども私たちの不幸は解消できない。だからこそ、ソーシャルワークが重要になってくるってことです。

お手元、次の5ページを。先ほど言いました。私たちはどんな時代に生きているのか。社会保険国家、あるいは所得再分配国家といわれている国家から、大きく変化して社会サービス国家、あるいは社会投資国家のほうにかじを切らないと駄目な

んだ、そういう時代に、この東日本大震災を経ていったっていうことを、ご理解いただくということになるわけですが。

私の財政学の立場から見ると、財政の機能っていうのは三つある。資源配分機能、これは、公共サービスを提供する機能のことをいいます。所得再分配機能っていうのはいいですね。経済の安定化機能っていうのは、景気変動をなだらかにしていく機能。

いいですね、教育っていうのも人々に割り当て可能ですし、医療も割り当て可能です。それから、福祉も全部割り当て可能です。割り当て可能なので市場に任せることもできるし、公共サービスとして政府のところでもできる。市場に任せればどうということになるかということ、市場に任せれば、市場は購買力に応じてそのサービスを配ります。

これまでの社会保障給付というのは下に書いてあります賃金代替給付と書いている社会保険、社会保険っていうのは、そうですね、賃金を失ったときに、正当な理由で賃金を失ったときに、賃金を代わりに出してもらう。これ社会保険でわれわれが売ってるわけです。例えば、失業保険、失業したっていう正当な理由で賃金失ったら配りますよ。医療保険もそうですね、疾病という正当な理由で賃金を失ったからお金を配ってあげますよ。それから、高齢退職という正当な理由で賃金を失ったら年金をやりますよということですね。

子ども保険は、理屈にも何もならない。子どもに対する保育サービスにしろ、教育サービスにしろ、これは共同で租税できちっと出せばいいだけの話なんです。それから、生活保障給付、これですね公的扶助。児童手当は子どもは元々、賃金もらってませんから、ここでもらうお金は生活保障給付として出されています。

これが対人社会サービスのほうに移してればまだよかった。つまり、これまで教育、医療、福祉などは、教会などをシンボルとしながら提供し合っていた相互扶助機能、それから、家族内で行っていたような養老、養育というような機能ですね。これは私たちは主として、女性に押し付けてきた。

さて、次のページを見ていただける。私たち人間の欲求には二つの欲求があると社会心理学で教えています。エーリッヒ・フロム『自由からの逃走』。それから、ローマ法王ヨハネパウロ2世もこの言葉を使っております。つまり人間には所有要求と、それから存在欲求は二つあるんだと。

所有欲求は、人間の外に介在するものを所有したいという欲求。存在欲求っていうのは being の欲求で、人間と人間とが触れ合いたい、人間と自然とが触れ合いたいということによって満たされる欲求です。これは愛情の欲求だと考えていただいても構いません。人間と人間とが調和したい。人間と自然とが調和したい。人間と人間とが愛し合いたい。人間と自然とが愛し合いたい、そういう欲求だというふうに考えていただいても構いません。

所有欲求が満たされると、私たち人間は豊かさを実感します。存在欲求が充足されると私たち人間は幸福を実感するんですね。スウェーデンで子どもたちに、あなたたちが幸せだと考えている瞬間を考えてみなさい。みんな両親と触れ合ったり、そういうときに幸福だと実感してるでしょうと、こういうふうに教えているところですね。

工業社会というのは存在欲求、幸福を犠牲にして所有欲求を満たそうとしている社会だと考えてる。これから私たちは、真の人間的な欲求である存在欲求を充足するために生きることができるよう、そういう社会に立とうとしてるんだ。こういうふうに考えられていくわけです。

社会サービスっていうのは人間と人間との触れ合いであって、これは愛に通じると言ってもいいですよと申し上げたとおりです。そして、ソーシャルワーカーの使命とは何か。これは、今までのように現金給付による再分配も重要ですから、社会保険とか、それから、公的扶助、日本でいうと生活保護ですね。このサービス給付という私たちの社会の共同の事業、社会がやってる共同の事業を、どうやって動員したら悲しみを幸せに変えることができるのか。これソーシャルワーカーの仕事ですね。つまり、社会の共同事業をどうやって動員

して、悲しんでる人々に提供してくかどうか。これ判断するのはソーシャルワーカーの仕事です。つまり、社会の共同事業の組織者。どうしても、いつも、人間の生活は生活様式は変わってきますから、それに合わせて人間の社会の共同事業を開拓をしていく。そういう使命を持って、そういう開拓者となるということです。

さらに最も重要な点は、実はこの背後にあるのは、繰り返すようだけれども、人間と人間というのは、温かい手と手を携えて生きていくんだっていう共生意識、この関係をつくり直すということであって、人間と人間との共生関係を築いていくコーディネーターの役割、これを果たしていくのがソーシャルワーカー、いうふうに考えていくことが重要だと思います。

私たちは、日本人は大災害を前にして、この地点を見過ごしてきました。阪神淡路大震災が起きた3年後に、ヨーロッパのジャーナリストたちが集まってシンポジウムをやったんです。この復興がどうだったのか。そして、そこでヨーロッパのジャーナリストたちが言ったことは何か。驚くべきことだったんです。わずか3年でここまで復興したの。道路も完璧に整備された。建物も完璧に修復されている、立ち直っている。フランスのジャーナリストが、これフランスでやっておられた。10年でもできない。こう感想を述べてた。

しかし、依然として仮設住宅が残っている。ここでは孤独死とか非常に偏見な状態が放置されている。この日本がやった災害の復興は、開発復興であって生活復興じゃない。こういう勧告を、勧告っていうか、そういうシンポジウムの結論になってるわけです。

私たちはいつも繰り返し、繰り返し行われる教訓、これ生かしておりません。福島からの教訓を生かさないと。福島で、なかなか立ち直らない人間の生活を、また生活復興でない方向にきってしまう危険性があるんですね。復興で一番重要なのは人間が生きていくっていうこと。生活様式があり、人間は命を、生命活動を軸にした生活のリズムがあります。復興っていうことは、復旧復興ってこ

とは、この生活のリズムを取り戻すことです。この生活のリズムを取り戻しながら、その生活のリズムをますます良い方向に拡大していくっていうことこそ、結び付かなさなければならないのに、どうしても繰り返し、繰り返し向かってしまう。

アメリカが真剣に貧困問題に取り組むのは、ケネディの後のジョンソン大統領のみですね。貧困との戦いというふうに掲げたの。しかも、1973年に石油ショックが起きると、大量生産、大量消費の時代は終わるんですね。これ以上、自然、資源を浪費したら、地球には、地球が持たなくなるという警告が付けてあります。

そこで、石油ショックの後、大統領に就いたジミー・カーター、カーター大統領は、大統領府、つまりホワイトハウスをソーラーパネルで覆って、これからの時代は再生可能エネルギーの時代だと。これまでのように化石燃料に頼る時代は終わったんだと宣言します。ところが、その次になったレーガン大統領は、このソーラーパネルを一挙に外します。そして、これからの時代は化石燃料の時代じゃない、原発の時代だと言って、世界に原発推進を出す。

もう一つ重要なことです。それは今までアメリカは、貧困とも戦い合ってきたけれども、これは間違いだと。貧困との戦いの結果、怠けてみんな働かなくて、それが貧困者なんだと。これからはやらなくちゃいけないのは貧困との戦いじゃなくて、貧困者との戦いだというふうにかじを切って、私たちの今の社会があるわけです。それをもう一度変えようとしなければならないときに、この東日本大震災が襲ってきたんだと。ますます、そういう意味でソーシャルワーカーの使命は重要になってきているし、私たち日本社会事業大学も果たさなければならない使命は大きいと、なるばかりだというふうに考えてます。私の拙い問題提起は、ここで終わらせていただき、櫻井部長と、災害とソーシャルワークないしワーカーとを結び付ける座談会を開催いたします。

神野 それでは、櫻井部長と私の対談を始めたい

と思いますが、むしろ福島県が、ソーシャルワーカーないしはソーシャルワークとして、どういうことを望んでいるのか。災害ソーシャルワークを考える上で、どんな問題、課題を私たちは考えたらいいいのかというようなことを、櫻井部長から主としてご意見を伺うということをしていきます。

災害には、そもそも復旧段階と復興段階と分けて考えるのが普通であって、関東大震災のときには復旧段階と復興段階はきちっと分けて効率的にやっていました。復旧段階というのは1カ月ぐらいで、てきぱきやっちゃうんですね。これ恐るべきことでした。それは何でかっていうと、戦前には法律と全く同じ効果を持っている勅令を出せたからです。勅令を出すことによって復旧ができたんですね。その後、復興段階に入っていくわけですから。

阪神淡路大震災、それから東日本大震災では、最初の復旧段階が、もたもたしているということが私の印象であります。先ほど言いましたように、それは、良識の社会ではなかったということが非常に大きな要因だとは思いますが。そうした意味で応急的な段階、私たちの福祉や医療に関わるような、そういったデーマットの対応の段階と、それからいわゆる復興段階。新しい生活のリズムを作り出していくという復興段階、二つあるかなというふうに思っております。

こうした違いを含めて部長から応急対応とそれから復興段階と対応段階に向けて、ソフトな面を中心にお話いただければと思います。よろしくお願いします。

櫻井 どうぞ改めましてよろしくお願いいたします。元々、神野先生の生徒ですので、先生と対談という、なかなか僭越な話でありますけど、よろしくお願いします。今のお話で、私、最初、ご紹介でも申し上げましたけれど、発災当時、それこそボランティア当時は、私も東日本大震災に行きましたけれども、業務で行ったわけではないので半ば個人的感想になってしまうかもしれません。

聞きますと当初は復興段階、まだ発災時、福島の場合、そもそも何が起きているのかよく分からないということもありました。大変な混乱状態の中でその時に、今のそれこそ、現場で頑張っていた方、今も頑張っている皆さんが沢山いらっしゃいますが、あまりにも大きな未知の事故が起きた時も、先ほどもご紹介した南相馬市は、全部で市民7万人ぐらいのところ、6万人が避難という状況でした。また、南相馬市の市役所職員の皆さまも、これ県職員もそうですが、家族が被災している、あるいは亡くなっているというような状況の中での対応ということで大変な混乱状態でございました。

そういったときには、どうしてもそこにいる人たちだけでは対応が十分にできるかという、それはかなり難しい状況ですので、そういうときには、ある程度の塊で短期的、物事が落ち着いたたら停滞するような部隊でもいいので、応急処置の部隊がどうしても本当は必要だろうと思っています。

ちょっと毛色が違う話になりますが、東日本大震災のときも各県から応援の職員が沢山来しました。阪神淡路大震災の時も実は各県から応援に行っているのですが、あの時はまだ、ああいった大災害が最近起こっておらず、初めての経験だったということで各地の消防本部から応援に行っても、例えばホースの金具が、実は各地で違っていました。そのため、現場に行っても手伝おうと思ってホースが繋げないとか、そういった課題があり、それも、やってみなければ分からない話とはいえ、最初、相対手間取ったのは事実です。

でも、その経験等を生かしまして、そういった資材を統一するとか、あるいは普段から緊急時には助けに行くという前提で、当たり前頻りに、何かが起こったときにはこの対応で行くということや常にもルール化して決めようと今、制度を設けました。そうしたところ東日本大震災においては、少なくとも、緊急時の連絡はもらえるし、何々県はどこの県に行くということで、各県が迅速な対応を取ることが出来ました。どうしても人員の絶

対数が足りないので十分だったわけではないですけれども。

この話を今回させて頂いたのは、他の分野にも同じで初動が大事ということです。お医者さんですとDMA Tという取組がございますが、色々な分野で同じように1回経験がある分野等で、ある程度準備をして、何かがあったときに出掛けていって応急処置的な対応をするというところが、どんな分野にもあれば、大変ありがたいなというふうに思っています。

あと、復旧・復興というお話がございましたけれども、今、福島は復興期にあります。インフラの整備はある意味手間を掛ければ道の修繕などは、もちろん材料コスト等は掛かりますが直ってきてはおります。先ほど申し上げましたとおり、例えば避難生活をして戻ったからそれで課題がなくなるかという、そういうわけではないということで、非常に長期的な話になると思います。そちらは緊急応急処置というよりは、比較的、息が長く、そして継続的に対応していくべき話にはなりますが、こちらについても長い支援、あるいは財政等の投入が必要なのかなと思います。

実際に災害を経験した人達や、緊急対応をした人たちのノウハウや、うまくいかなかった反省なども含めて共有をして備えている集団などがあると本当にありがたいですし、次へ有事の備えに繋がるのではないかと思います。

神野 ありがとう。それからもう一つ、阪神淡路のときには経験しなくて、東日本大震災で初めて経験したこと。特に福島県が初めて経験したことだというふうに言っていると思いますが。災害が起きたときに、そこに住んでいる住民を他へ全部移しちゃう、で、また戻すっていう経験っていうのは、地震を経験してるのは、地震の中では、経験したのは、まず三宅島なんですね。三宅島噴火が起きたときに三宅島の島民の全部を移す。移してまた戻すという作業をやると、これはそれなりに、生活のリズムを新たに作りましょうっていうのは非常に苦労がいる。

ただ、三宅島のときにはどうだったのかというと、島民をみんな同じ所に移している。しかも東京都って、同じ都道府県の中で移している。そしてまた元に戻したということなんです。福島が特に経験している問題点ということでいけば、移したところが、取りあえず今は県のほうに戻しましたけれども、それまでは各県を含めて、いろんな所に戻したよね。所沢に来て移した。そしてそれをまた戻した。こういうこの生活のリズムの幾順にも渡る変化の中で、福島が新たに経験したこと、あるいは教訓っていうのがあるかと思いますが。そうした点について少しお教えいただければと思います。

櫻井 神野先生が仰っているように、三宅島からの避難の事例がありましたが、規模からいくとこれだけ多くの方々が避難をして、特に避難指示が出ているから町丸ごとや、ほぼ強制的に移動したというのは、かなり、これまでにない経験だったのではないかと思います。それ以上に、先ほどもお話しさせていただきましたが、避難生活がこれほど長期にわたったのも、これまた未曾有の経験なのかなと思います。

そのことが引き起こす課題というのが、先ほどの繰り返しになりますが、避難生活をして戻ればそれで大部分の課題が解消されるというわけではなく、避難生活が長ければ長いほど、長い生活に順応せざるを得ないので、無意識にストレスを抱え込んでしまい、そういう意味で、今までにないぐらい住民の皆さんにストレスが掛かっていると思います。そうした点が今回の震災における教訓の一つじゃないかなと思います。

もちろん、他の災害の時には、それぞれにご負担掛かっていると思いますが、それ以上に課題の根が深く、避難指示の解除までの期間が長い、というところが今までにない経験なのではないかなと思います。

神野 ありがとうございました。ちょっとこれ古いかもしませんが、私も役目柄、被災地の、特

に福島沿岸部にしょっちゅう入るわけですが、今、現在でも、いわき市などでもさまざまな問題が起きてると聞いています。

そのときにさっき申しましたように、ソーシャルワーカーという活動は非常にやりにくいというか、どういう回路を引き出していたらいいのかわからないと。しかも戻れない地域にいる人々との異なった地域での生活っていうのは、非常に異なってきた後の異常な生活リズムになってしまったので、そこら辺、差し障りのない範囲で何かご苦労があれば。あるいはそういうときのソーシャルワーク、ないしはワーカーの取る行為の道標みたいなものがあればお聞かせいただければと思います。

櫻井 今、先生が仰ったことというのは、勿論、色々な所から伺っておりますし、それぞれに大変、深い課題であると思います。一つは先程の続きになるかもしれませんが、今までにないことというのは、今までにない規模ということもあって、それぞれの被災者の方、また避難している方同士の中でも、皆さん相当な事情が異なるということがございます。

先日、南相馬市に伺いましたが、発災直後は市役所職員も含めて皆さんずっと大変ですけど、住民と同じ立場にあったのですが、その後の避難生活に入ると、それぞれの事情というのは大きく変わってまいります。沿岸部全体で見ても、先程、光と影というお話をしましたけれども、発災直後よりも、光の部分も影の部分も着実に一步一步は進んではいますが、その差というのはむしろどんどん広がっていると。このギャップというのが課題だと思います。

そうしますと、例えば今でも避難をしているときと、例えば今、10人の友達の中で自分だけが避難しているというケースがあったとすると、心理的負担なりショックというのは最初も大変ですが、なお、別の面も出てくると思います。今の、避難されている方の話もそうだと思いますが、発災直後よりは今のほうがいい、仮によかつ

たとしても他者との比較ですとか、そういった意味で、むしろ孤立感を感じてしまうということなこともございますので、そういった辺りが、人それぞれで本当にみんな違う、地域によっても違いますし、その中の個人個人でも、どんどん、どんどん課題問題が多様化していると思います。

そこに対して、先程、神野先生から一律ではなく、個々の決意というお話ございましたけれども、まさに人によって個々で違うので、そこをうまくフォローして見守っていく、そういった役割を誰かがやっていかないといけないというふうに思っています。これはそれぞれ先ほどのベーシックインカムではないですが、そういった想いを抱えている人にやっていていただきたいなと思っているところです。

神野 ありがとうございます。それでは最後になりますが、繰り返し強調されたところについてはありますけれども。光と影、風評の風化というのは非常に聞いてて分かりますね。そういう問題で私たちに再度訴えたいことをお聞かせいただいた上で、私どもの大学や、福島県外の人々に向けてのメッセージ等々ございましたらお聞かせいただければと思います。

櫻井 繰り返しになるかもしれませんが、今の福島の場合というのは少し特異な事情があり、これからの長期化が予想されるような状況です。今はまだ復興の途上だというお声も多分あると思いますが、国から特別に財政措置を受けてできていることもあります。

先程も神野先生にお話しをいただきましたが、最終的には県民だけではなくて国民の皆さん、全ての皆さんの合意があって、それだけのことを福島に対してしてもいいということを確認させていただいて、色々な取組を進めているわけですが、風化ということで段々、段々、「もういいんじゃないの。」と思われてしまうこととか、本当はまだ大変なときもあるにも関わらず、置いていかれてしまうというのが一番気にしているところで

す。

今、色々なところで、福島県の日本酒を評価いただいて多くの方に飲んでいただいているところがございますけれども、引き続き何とかやっていきたいと思っています。両面、両面と何度も申し上げて申し訳ないのですが、明るい部分についても分かってほしいと思いますし、そうではなく、辛そうな部分も分かってほしいということで、どんな形であれ、福島に足を運んでいただければということと、そのことがひいては、息の長い支援にも繋がっていくのではないかと考えています。

最後に、二つお伝えしたいことがあります。今、福島には長期の課題があります。例えば、行政でも社会福祉協議会などでも発災以来、頑張っておられる方が沢山いますが、震災から6年が経ちまして、例えば、50代の人であれば60歳近くになっています。ですので、常に新しい人にも来ていただきたいということで、是非、福島に足を運んでいただいたり、あわよくばお勤めいただいたりすると大変ありがたいと思っています。

もう一つは、今、大変課題が多い状況でございますので、学びの一環として、足を運んでいただいて見ていただいて、少しお助けいただくというようなところも、お願いしたいと思います。これは私の言葉ではなくて、先日お会いした南相馬市の方が仰っていたのですが、是非、課題先進地域ではあるのでそういった場所に来ていただければ助かるところもありますし、そこで色々なノウハウを吸収していただいて、冒頭申し上げたような、またどこかで何か起きたときに、そういったノウハウを継承していただければと思っています。

そういうのも、ずっと来ていただければ一番ありがたいですけど、たとえそうじゃなくても一回来ていただいて見ていただいて、お力をお貸しいただけるとありがたいです。福島のためだけではなく、これからどこかで何かがあったときに、その知見を生かしてご活躍をいただいて、社会全体が助かるということがあるのかなと思っています。

神野 どうもありがとうございました。きょうは櫻井部長におかれては、大変お忙しいところをわざわざ貴重な時間を割いていただいて、この研究会にご参加いただいたこと深く感謝しております。さらに、内堀知事はこれまで長い間、副知事として苦勞を重ねられて、難しい時期に知事をやっていらっしゃいます。とにかく私どもの大学等々で声を掛けていただくということを深く感謝申し上げる次第でございますので、知事にもよろしくお伝えくださいませ。

さらに今後とも私どもの大学で、福島の悲しみを少しでも幸せに変えることができる、それが歴史にといいましょうか、私たちの後輩が学んでいく導き星になるような教訓を、そこから引き出せればというふうに願っておりますので、今後とも教育を支えていただきながら、災害復興支援問題を考えていきたいと考えておりますのでよろしくお願いします。

7年目の福島 － ふくしまの“今” －

平成29年6月24日

福島県企画調整部長 櫻井 泰典



ふくしまから
はじめよう。

Future From Fukushima.

0 本日のイントロダクション

◆ 福島は今 光と影 影の中の光

- ・ 復興進むも一般的なイメージは変わらない（風評）
- ・ 引き続き「有事」も時間が経過（風化）
→ 数字を示しつつ実際の姿を紹介

◆ ソーシャルワーカー（+目指す人）に期待すること



ふくしまから
はじめよう。

1

1 東日本大震災と災害 ①津波と地震被害

2011年3月11日・・・



[被害概要]

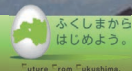
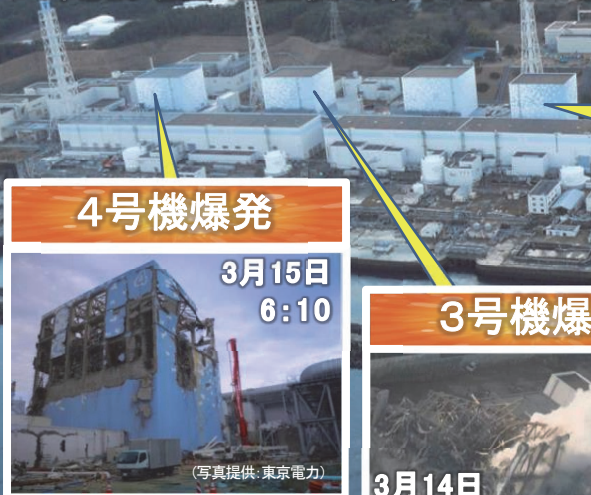
- 死者：3,972人
(2017年6月12日現在)
- 家屋被害：
全壊15,224棟
(2017年6月12日現在)
- 公共施設被害：
約5,994億円
(2012年3月23日現在)



2

1 東日本大震災と災害 ②原発事故

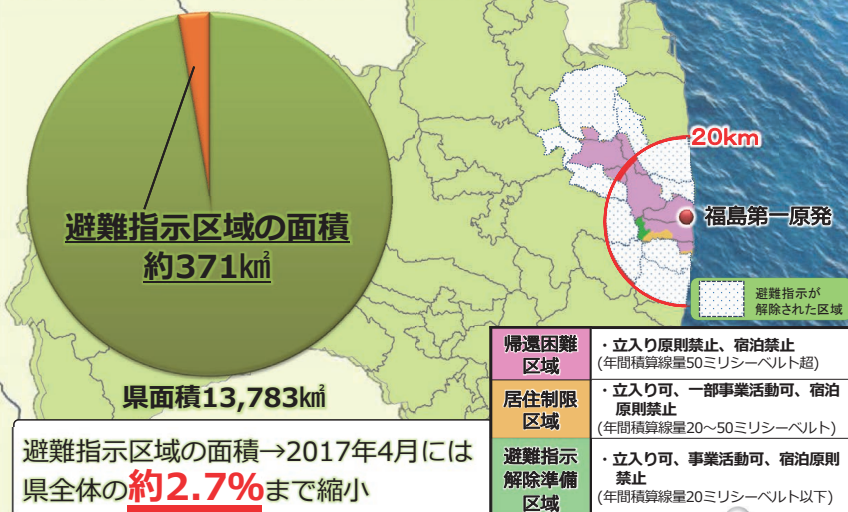
津波が襲った直後の東京電力福島第一原子力発電所



3

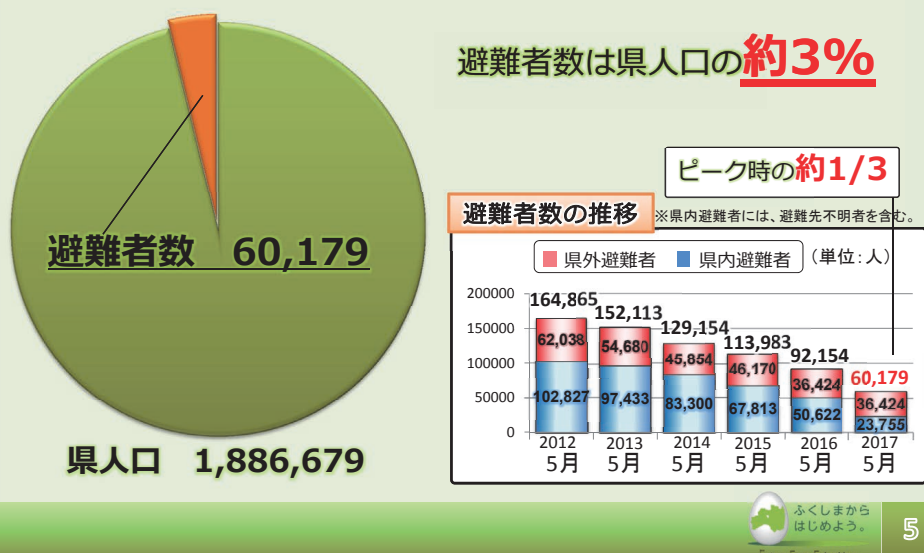
2 現在の被災状況 ①避難指示区域 2017.4.1～現在

県面積に占める避難指示区域の割合

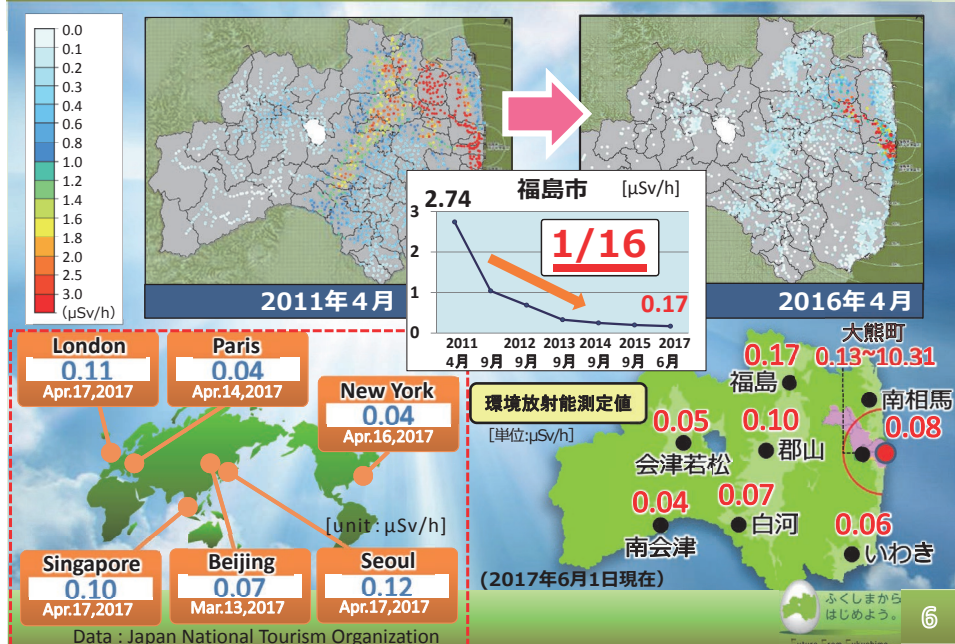


2 現在の被災状況 ②避難者数

県人口に占める避難者数の割合 (2017年5月現在)



3 戻りつつある環境 ①県内の空間放射線量



3 戻りつつある環境 ②日々の暮らし

原発事故後の状況

現在の状況

長袖・マスク姿で登校する子どもたち



現在の子どもたちの様子



現在の郡山駅前の様子



ふくしまからはじめよう。

7

3 戻りつつある環境 ③福島第一原発の現在

福島第一原子力発電所 構内配置イメージ図

資料提供: 東京電力(株)



- フェーシング作業等により放射線量が低減し、構内のほとんどの範囲で全面マスクの着用が不要に！



- 給食センターや大型休憩所の設置など、作業環境も大きく改善



8

4 進みつつある復興 ①災害復旧



災害復旧工事の99%で着工、91%が完了 (2017年4月末現在)



9

6 変わらない美しい風景 ①県内の風景

春



滝桜(三春町)

夏



相馬野馬追(南相馬市)

秋



只見線

冬



鶴ヶ城(会津若松市)

DIAMOND ROUTE JAPAN

検索

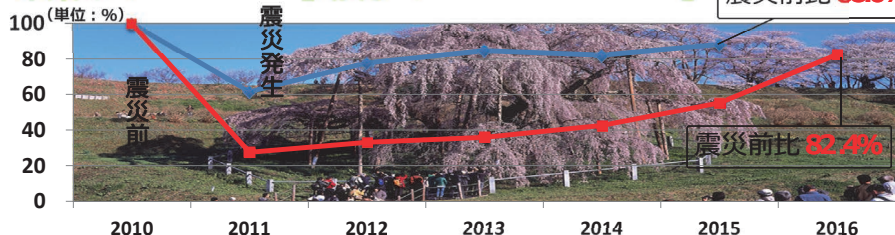


ふくしまからはじめよう。

10

6 変わらない美しい風景 ②観光客の動向

本県の「観光客入込」及び「外国人延べ宿泊者」 震災前比 **88.0%**



全国新酒鑑評会で福島県の日本酒が
金賞受賞数5年連続第1位に！(22銘柄)

國權	月守	王壽	大吟醸	山崎	悠里
大吟醸	大吟醸	大吟醸	大吟醸	大吟醸	大吟醸
大吟醸	大吟醸	大吟醸	大吟醸	大吟醸	大吟醸
大吟醸	大吟醸	大吟醸	大吟醸	大吟醸	大吟醸
大吟醸	大吟醸	大吟醸	大吟醸	大吟醸	大吟醸

2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016
1位 (23)	2位 (21)	2位 (17)	2位 (18)	1位 (20)	2位 (19)	2位 (22)	1位 (17)	1位 (17)	1位 (24)	1位 (18)	1位 (22)

()内は金賞受賞銘柄数

ふくしまからはじめよう。

11

7 食の安全 ①厳しい基準

日本の基準は相対的に厳しい基準

(単位: Bq/kg)

日本 食品衛生法の 基準値		EU Council Regulation (Euratom) 2016/52		アメリカ CPG Sec. 560.750 Radionuclides in Imported Foods - Levels of Concern	コーデックス CODEX STAN 193- 1995	
飲料水	10	飲料水	1,000	食品	乳児用食品 一般食品	1,000 1,000
牛乳	50	乳製品	1,000			
乳児用食品	50	乳児用食品	400			
一般食品	100	一般食品	1,250			

※上記における基準値は、受ける線量を一定レベル以下にするためのものであり、必ずしも安全と危険の境目となるものではない。
※CODEX：国際連食料農業機関（FAO）と世界保健機関（WHO）が設立した、食品の国際基準を作る政府間組織
（加盟国：2016年3月現在187カ国）
出典：厚生労働省資料をもとに作成



12

7 食の安全 ②モニタリング

放射性物質モニタリング！出荷前の検査で基準値を超えたものは流通させない。
基準値超過は発災直後に一定数見られたが、現在では一部野生のものを除き皆無。

県産農林水産物のモニタリング等状況

◆米の全量全袋検査の結果
(2016年8月24日～2017年3月31日)

検査点数	基準値超過数	超過数割合
約1,024万点	0	0.00%

県内全域の全ての米袋を検査

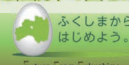


2016年産米の99.99%が検出下限値
=25ベクレル未満

◆野菜・果物、畜産物等の検査結果
(2016年4月1日～2017年3月31日)

種別	検査数	基準値 超過数	超過数 割合
野菜・果実	3,793件	0件	0.00%
畜産物	4,349件	0件	
栽培山菜・キノコ	1,049件	0件	
海産魚介類	8,766件	0件	
内水面養殖魚	118件	0件	0.26%
山菜・野生キノコ	783件	2件	
河川・湖沼の魚類	621件	4件	

しかしながら、県産農産物の価格は震災前より低い水準で推移しており、また、輸入規制を継続中の国もある。



13

8 さらなる復興へ ①重点分野

郡山市 福島再生可能エネルギー研究所



再生可能エネルギー関連産業
エネルギー供給県であった歴史を踏まえ、新たな経済発展の基盤とする。
→再生可能エネルギーの導入拡大を推進。

福島県沖 浮体式洋上風力発電実証研究事業



イノベーション・コースト構想

廃炉には高度なロボット開発・研究が必要。
→廃炉ロボットの研究開発を通じ、災害対策、物流、農業、福祉など各分野で活躍するロボット産業の地へ。




医療関連産業の集積

震災前から優れた技術を持つ企業が立地
→更なる集積を進め、日本における一大拠点を目指す。

ふくしま医療機器開発支援センター 郡山市



ふくしまからはじめよう。 16

Future From Fukushima

8 さらなる復興へ ②整備されつつある拠点

① ロボットテストフィールド



陸・海・空のロボットの実証試験を行う世界に類を見ない施設 総事業費 191億円

⑥ 福島再生可能エネルギー研究所



世界最先端の水素エネルギー利用技術の研究 総事業費 191億円

⑦ 浮体式洋上風力発電実証研究



世界最大級7MW風車などを設置 総事業費 500億円超

再生可能エネルギー関連産業

イノベーション・コースト構想



③ 廃炉国際共同研究センター「国際共同研究棟」



廃炉のための基礎的な研究の実施 総事業費 約13億円

④ 大熊分析・研究センター（放射性物質分析・研究施設）



放射性物質や放射性廃棄物の処理技術の開発 総事業費 約800億円

⑤ 楡葉遠隔技術開発センター（モックアップセンター）



廃炉に必要なロボットの開発 総事業費 約100億円

⑧ ふくしま国際医療科学センター



最先端の医療機器によるがんの早期発見など高度な治療を提供 総事業費 約430億円

⑨ ふくしま医療機器開発支援センター



医療機器の開発から事業化まで一貫して支援する日本初の施設 総事業費 117億円

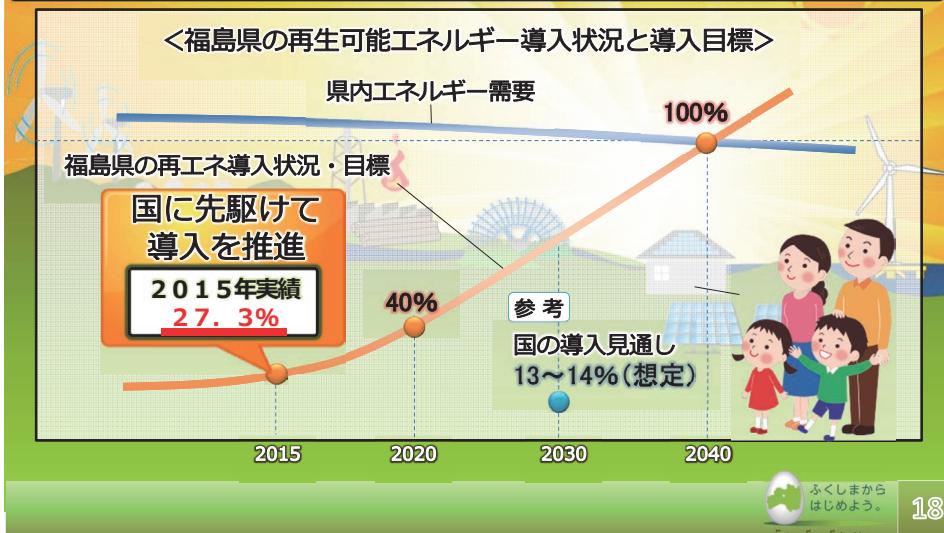
医療関連産業の集積

ふくしまからはじめよう。 17

Future From Fukushima

8 さらなる復興へ ③再生可能エネルギーの推進

原子力に依存しない、持続的に発展可能な社会の実現を目指し、
2040年に県内エネルギー需要の100%相当を再エネで創出することを目指す

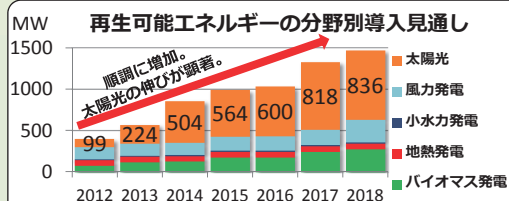


8 さらなる復興へ ③再生可能エネルギーの推進

福島県は再生可能エネルギーの好適地

①震災前、首都圏電力の1／3を供給、全国有数の電力県。

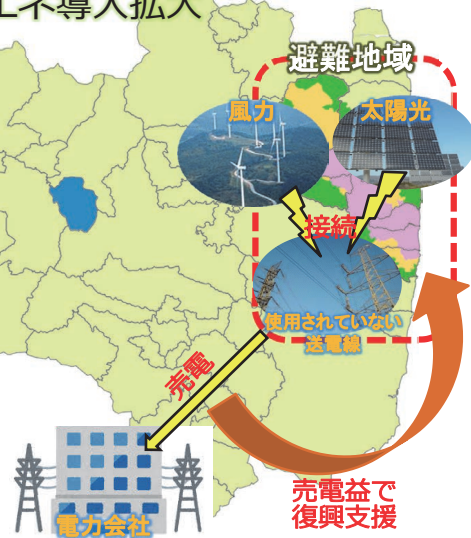
②面積は全国第3位で、多様な資源（太陽光、風力、地熱、水資源、森林資源など）を有し、再生可能エネルギー導入の大きな可能性を持つ。



8 さらなる復興へ ③再生可能エネルギーの推進

原発用送電線を活用した再エネ導入拡大

- ① 原子力発電所事故後、東京方面への送電線が使用されていない。
- ② 避難地域に再生可能エネルギー発電施設を設置し、使用されていない送電線に接続。
- ③ 再生可能エネルギーにより生み出した電力を電力会社に売電。
- ④ 売電益を避難地域の復興支援に活用。



ふくしまからはじめよう。

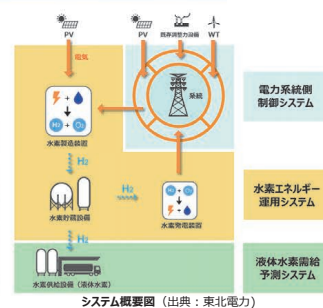
20

8 さらなる復興へ ④福島新エネ社会構想

水素社会実現のモデル構築

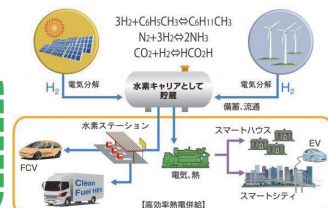
1 世界最大の大規模水素製造(CO2フリー)

- ① 本県内において、再エネを活用した大規模水素製造(1万kW級)に関する技術実証を開始。
- ② 2020年までに製造を開始し、“福島県産水素”を東京オリンピック・パラリンピックの会場で活用。



2 世界最先端の水素エネルギー技術の研究

- ① 再生可能エネルギーを効率よく水素に変換する技術の研究。
- ② 水素を吸収・放出する水素吸蔵合金を活用したコンパクトで安全な水素利用システムの研究。



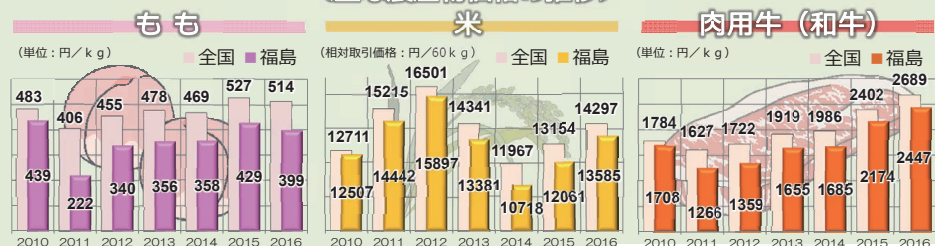
ふくしまからはじめよう。

21

9 「影」・・・残された課題①

＜主な農産物価格の推移＞

【出典】東京都中央卸売市場HP



＜食品の購入に際しての調査＞

(食品中の放射性物質を気にする人のうち、)
「福島県産品の購入をためらう」と回答した人の割合

H25. 8	H26. 8	H27. 8	H28. 8	H29. 2
17.9%	19.6%	17.2%	16.6%	15.0%

＜食品中の放射性物質検査について＞

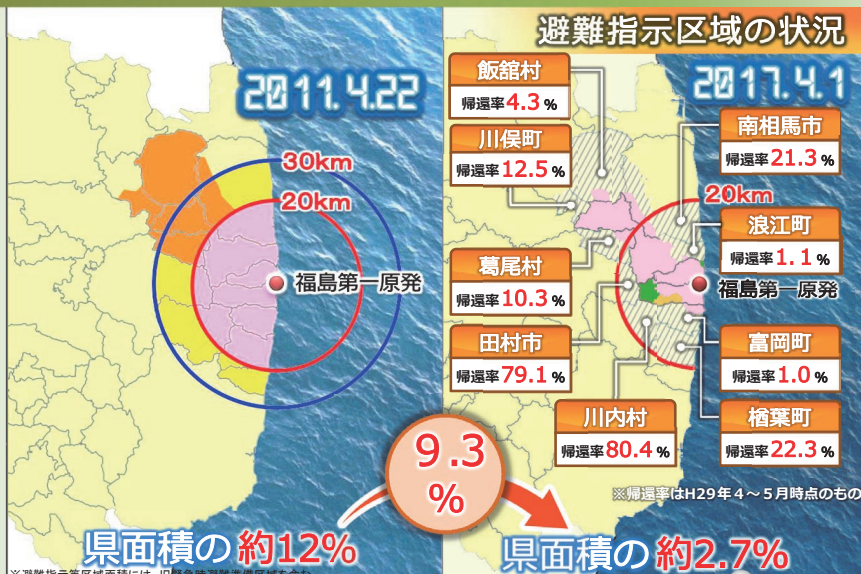
検査が行われていることを「知らない」
35.2% (前回34.8%)



22

9 「影」・・・残された課題②

避難指示区域の状況



ふくしまからはじめよう。

23

10 避難生活が与える影響

◆ 長く続く仮設住宅での暮らし

- 狭く、プライバシーの確保が十分ではない
- 地縁のない場所
- 支援員による見守り、ボランティア等による集いの場



仮設住宅



見守り活動



交流会



ふくしまからはじめよう。

24

10 避難生活が与える影響

◆ 災害公営住宅や避難元に戻れば問題解決ではない (二度の環境変化が起こすストレス、変化自体がもたらす課題)

- 環境の変化によるストレス
 - ・ 静かすぎて眠れない。
 - ・ 集まりがなくなって寂しい。
- 世代間の事情の違い → 核家族化



- ・ 外に出る機会が減り、孤立化が進む
- ・ 一方、見守りがしにくくなる
- ・ 元々有する問題の顕在化、複合化



いわき市関船団地



福島市飯野町団地



ふくしまからはじめよう。

25

11 影の中の光

◆ 課題が100あれば、100の課題を解決する会社を作る

(株式会社小高ワーカーズベース 代表取締役 和田智行 氏)

「住民ゼロの状態からもう一度人が住み始めるなんて、先進国のどこを見てもおそらく前例がないことだと思います。ぼくらは震災ですべてをなくしてしまいましたが、それならまっさらの状態から未来に残したいものだけを創っていけばいい。これが小高ワーカーズベースを立ち上げた理由です」



和田智行 氏



下
記
ム
ペ
ー
ジ
よ
り

女性がいいきと働く 「HARIOランプファクトリー小高」

「外から仕事の様子が見えることには相当こだわりました。女性がいいきと働いている風景が見えることは復興の大きな励みになりますから。面白い仕事をつくれれば、こうやって若い人も働きに来るんだっていうことが、視覚的にも証明できたと思います」



チャレンジ!ふくしま創生プロジェクト

<https://www.securite.jp/fukushimaken>

検索

ふくしまからはじめよう。

26

11 影の中の光

◆ 多くの方が今でもボランティアに



家屋の片付け



農業用施設の解体撤去



仮設住宅でのイベント



こども達の野外活動支援



シニア料理教室



植樹活動

ふくしまからはじめよう。

27

12 皆さんに期待すること（ソーシャルワーカーとして）

◆ 課題は複合化。対応には専門知識が必要

→ 様々な問題を把握できる知識とスキルを身に付け、課題を解消できるワーカーに

◆ 課題は山積

→ 地域に来てほしい



ミーティング



訪問活動



電話相談



ふくしまから
はじめよう。

28

12 皆さんに期待すること（学生として）

◆ 一度 福島に来て見て

→ 被災地では今でもボランティアを募集中

南相馬市災害復旧復興ボランティアセンター

検索

→ 「ワーキングホリデー」も実施中

ふくしまふるさとワーキングホリデー

検索

→ 旅行先にもぜひ



南相馬市災害復旧復興
ボランティアセンター



ふくしまでワーホリにチャレンジ!

春休み、夏休みなどの長期休暇を利用して2週間～1ヶ月程度、福島県内に滞在し、県内の企業や農家などで就業し、収入を得ながら田舎暮らしを体験いただく制度です。



ふくしまから
はじめよう。

29

13 最後に 福島の特産品とパーソナルストーリー



100%



ふくしまから
はじめよう。

30

「悲しみ」を「幸せ」に変えるために ソーシャルワーカーへ期待すること ー戦災復興や震災復興を展望しながらー

日本社会事業大学学長
神野直彦
2017年6月24日

1. ソーシャルワーカーに期待される使命

(1) 日本社会事業大学の使命

- ・「悲しみ」を「幸せ」に変えるために、指導的な福祉人材を養成すること。
- ・「戦災」という「悲しみ」の克服から、「災害」という「悲しみ」の克服へ

(2) 常識としてのソーシャルワーカーの使命

「ソーシャルワーク」専門職は、人間の福利(ウェルビーイング)の増進を目指して、社会の変革を進め、人間関係における問題解決を図り、人々のエンパワーメントと解放を促していく」

*国際ソーシャルワーカー連盟と国際社会事業大学連盟による2000年の採択

2. 東日本震災という「悲しみ」からの教訓

(1)二つの自己再生力の喪失という「危機」のもとで

- ・人間の社会の自己再生力の喪失
- ・人間の生命を育む自然の自己再生力の喪失

(2)「社会保険国家」から「社会サービス国家」への転換期のもとで

重化学工業を基盤とした所得再分配国家としての福祉国家から、サービス産業・知識産業を基盤としたポスト社国家の模索。
cf.社会投資国家

(3)都市、農村、漁村という大地の上にへばりつく人間のあらゆる生活様式が襲われる。

関東大震災も阪神淡路大震災も大都市の災害。

3. 「危機」が焙り出す本質

(1)生命主義

人間の社会の価値体系で、最上位に位置づけられなければならないのは、人間の生命だ。

(2)共生主義

- ・人間の「生」は共にするものだ。
- ・人間と人間とが「生」を共にするだけでなく、人間と自然とも「生」を共にするものだ。

(3)参加主義

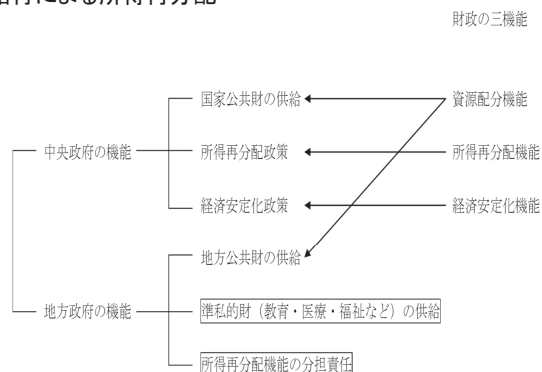
人間の社会の共同の困難に傍観者としてではなく、生活者として問題解決に参加しなければならない。

4. 悲しみの「分かち合い」としての ソーシャルサービス

- (1) 社会サービスを意味する「オムソーリ」は、悲しみの「分かち合い」を意味する。
悲しみの「分かち合い」は、悲しみに暮れている人を幸福にするだけでなく、分かち合った人をも幸福にする。
- (2) 悲しみの「分かち合い」を支える共生主義は民主主義を機能させる。
・共生主義＝誰もが誰に対して不幸にならないで欲しいと願い合っている確信。
・親和的対立と親和的議論
- (3) 必要に応じたユニバーサル・サービスを実現する民主主義

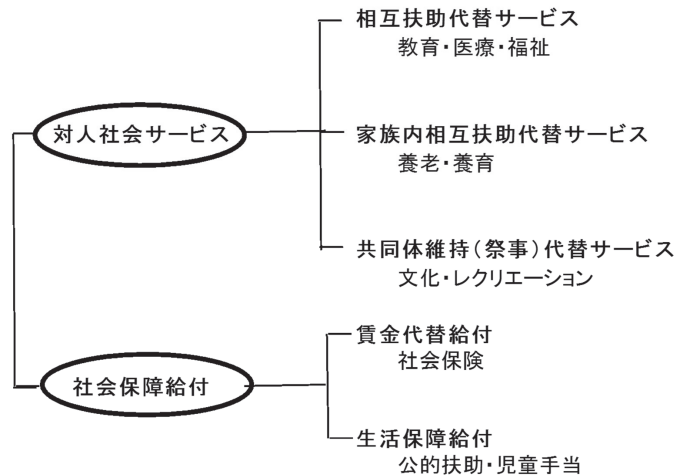
5. 「幸せ」の再創造

(1) 現物給付による所得再分配



* 準私的財（教育・医療・福祉など）の供給 の囲みは付加・拡大される地方政府機能

(2)「社会サービス国家」への途



(3)「所有(having)欲求」の充足から「存在(being)欲求」の充足へ

- ・所有欲求の充足＝豊かさ
- ・存在欲求の充足＝幸福

(4)社会サービスは人間と人間との触れ合い→愛の充足といってよい。

(5)ソーシャルワーカーの使命

- ・社会の共同事業の最適な動員
 - ⇒社会の共同事業の組織者
 - ⇒社会の共同事業の改革者
- ・人間と人間との共生関係を築くコーディネーター